

二学期を迎える新入園児について思う

西 本 美 節

子どもにとって幼稚園とはどんなところ

生まれて初めての集団生活を経験してきた園児にとって、夏休みほど、自己を取りもとせる機会はないにちがいありません。おとなでさえ、ある日突然、名まえも知らない大勢の人の中に投げ込まれたら、どんなに戸惑うかもしれません。まして、緊密な母子関係の中だけで過ごしてきた幼児にとって、幼稚園は楽しいどころか、恐ろしい所であり、苦しい所であって、我慢するのが精一杯でした。それなのに、「ちゃんとしなさい」「きょうは何を習ったの」「何をしたの」「お友だちをいじめてはだめ」「いじめられたの。悪い子がいるのね」「先生の言うことを聞かない子は、頭が悪くなって、お勉強ができません、いい学校にはいられないよ」「しっかり先生のおっしゃることを聞いてくるんですよ」「そんなかっこうしたら、皆に笑われます」「幼稚園へ行っているのに、どうしてそんなことく

らいできないの」「ぐずぐずしないでサッサとしなさい」「○○ちゃんはよくできるのに、あんたはなによ、だめね」「そんなにちょこちょこしないで、少しはじっと落ち着いていなさい」「赤ちゃんが寝ているんだから、幼稚園へ行っているお兄さんは少し静かにできるようにしよう」「お姉さんが宿題やっているんだから、ひとりで静かに遊びなさい」「いつまでも暗くなるまで帰ってこないんだから、困った子ね」「テレビばかり見ないで、少しは○○ちゃんとお外で遊んだら。家の中ばかりいると、かたづかなくて。もういいかげん幼稚園が始まってくれるといいのに」「そんなに冷たい物ばかり食べたらいけません。先生とお約束したでしょう。やめなさい」「どうして食べないの。せっかくおばあちゃんが買ってきてくださったのに、いやらしい子ね」「……こんなことばを始終聞いていると、「ああ、わたし(ぼく)は本当にこのお母さんの子どもなのかしら」と

悩んでしまいます。「ほくは仮面ライダーになって『エイヤ!』とやっつけたい」「わたしは秘密のアツ子ちゃんになって、どこか魔法の国の王女様になりたいわ」と思うでしょう。やればやるで文句を言われ、しなければしないでお小言を食います。ちょっと遅れただけ、忘れただけなのに、夏休みのお約束ができないと「ちっとも守れないんだから……だめねえ」と言われます。そのくせ、お母さんは「アーラ、K子ちゃんの画用紙質うの忘れたわ。あしたでいいでしょ」と平気で言い、あしたの約束が果たされたのは四、五日もたってからです。四年余りも付き合っている相手だし、好きな人だから我慢するけれど、幼児にとって母親は付き合いつらい人です。夏休みの初めごろは、こんなに気楽な生活があったのかと、しみじみ感じました。日がたつにつれて幼稚園の先生が恋しくなり、Yちゃんとどろんこ遊びをしたことや、今ごろし子ちゃんは何して遊んでいるかしら……などと思いつくころ、ようやく二学期が始まります。母親を離れてひとり立ちする心も、他人を思いやる気持ちが一学期の間に育っていたのです。もしわたしたちがすることなすことに、いちいち他人から干渉されたとしたら、きつとノイローゼになってしまうでしょう。幼児はなんとやさしくて思いやりのある、おおらかな心を持っている、すばらしい人間

ではありませんか。

不思議なことが一杯ある夏休み

初めての夏休みは、幼児にとって、家庭外の物事に興味や心が強く持たれるときでもあります。毎年めぐってくるお盆や夏祭りの行事も、「どうして」「なぜなの」と質問の連発です。だんまり屋の幼児は、その子なりに「なぜ雷はなるのだろう」「夕立ちの雨は、大きな粒がボタボタと落ちてくる。大急ぎで走って帰ったのに追っかけてくる」などと考え、「ここに咲いていたお花はどこへ行ってしまったんだろう」「アリンコってたくさんいるもんだなあ」と自然を友として語りかけ、アリの穴を見つけては「おむすびころりん」のお話を、先生と共に思い浮かべながら、想像の世界を楽しんでいます。海べへ出たわんぱく坊主は、貝がらや小石を波がしらに乘せて遠く飛ばすことを覚えるでしょう。大波にころがされても、泣き顔を見せず「こんなん平気、へいちゃら」と強がりを言うでしょう。力いっばいの自然との戦いは、すがすがしい気分を残し、やる気を起こさせます。

こわがり屋のT君も、ことしは親類にひとりで泊まることができ、ちょっとした冒険を体験しましたが、やればうまくやれ

るといふ自信が生まれ、二学期のさいきよいスタートを切りました。甘ったれの耳ちゃん、赤ちゃんの膚にパウダーをはいたり、赤ちゃんと二人でおるす番をしたりして、すっかりお姉さんらしくなり、「赤ちゃんはお話ができないから、かわいそう」と、自分から進んでいろんなお手伝いをするようになりました。人の役にたつことは、お母さんになつたみたいで、うれしくてしようがありません。このことを早く幼稚園の先生やお友だちに話したいと思っています。

遊園地へ行かなくても、海や山へ行かなくても、幼児は幼児なりの心とからだで、生活を見つめ考え、豊かな経験をするものです。「じっとしているのに、なんで暑いんかなあ」と考え、なんでも意欲的に自分の中に取り入れようとします。昼下がりの道を歩き駅にたどり着いたとき、スーッと涼しい風がほほをなでました。「お母さん、だれがクーラー入れたの?」「クーラーと違うのよ」「クーラーでなくてもこんなに涼しいのは、なぜだろう?」と不思議に思うのです。きのうは筆先のように見えたものが、けさ起きて見たら、開いて大きな赤い花がラッパみたいに咲いていました。前に、先生といっしょに、ちっぼけなまっ黒い小石みたいな物を、植木鉢ちに入れました。そのとき先生は「朝顔の種です」と言ってたから、これはきつと朝顔と

いう花だろう。朝顔って緑色をした葉っぱばかりだと思つたのに、ヒラヒラが赤くて白い穴が見えた。隣の家の青いのもよく似ているなあ。お母さんの声がします。「ねえ、お父さん、お隣の朝顔、紫色よ。とてもりっぱに咲いているわ」「あれも朝顔だった」「ねえお母さん、うちの朝顔咲いたよ。見て、見て」「けれども、うちのチンチクリンな朝顔は、お母さんにとつては魅力がないらしい。「ああ、そう」「そっけない返事でした。「いいよ、いいよ、お隣のよりずっと大きく見えるもん」「それに、絵にかくといいわ」「もう、うんざりだ」「お母さん、幼稚園の先生はね、『お花は、大切にかわいがって育てるものですよ』って言ってたよ。だから、かかなくてもいいの」「それ以来、T君は「これは、自分がしっかり育ててやらなければ……」と、責任を感じ、生き物を育てること、命を大切にすることを覚えました。「来年こそは、お隣のおじいちゃんに負けないよう、しっかり大きく育てよう。それには、お隣のおじいちゃんと仲よしになつて教えてもらわなければ……」すなおに人の話を聞いて習うという協調の態度が芽ばえてきました。しかも相手は両親でなく、隣の家の人というように人間関係の広さがりさえも持つことができるようになり、社会人とのつながり、親しみの情もこうして育っていきます。

友だちとの遊びがとっても楽しい新学期

日本の夏はとりわけ蒸し暑く、過ごしにくい季節です。けれども、家庭中心の日常生活の中で、良いことも悪いことも見境なく取り入れた幼児は、背たけの伸びや、日焼けした黒さだけでなく、心もからだも成長し、さまざまな経験をして、二期を迎えます。長い休みの間に調子が狂ったままの幼児は、幼稚園の集団生活から逃避するようになり、入園当初の状態にあともどりしたり、登園をいやがったりすることもあります。このような幼児には、二期期が始まる一週間か十日ぐらい前に、絵はがきを送ったり、電話を掛けたりなどして、登園に対する心構えを持たせるように、教師が積極的に働きかける必要もあります。身近な事柄について子どもと個人的に話し合ったり、ときには友だちと誘い合わせて迎えに行くのもよいでしょう。

夏休み中ひとりひとり違った経験をしてきたのですから、まずそれぞれの幼児の話をすなおに受け入れてやり、友だち仲間の中で話し合うようにしむけることが大切です。集団生活のルールをよくのみこんでいるように見える幼児の中に、目だたないおとなしい子どもがいます。こういう子は、ふだんつい見落とされやすいタイプなので、夏休み中のいろんな経験を通して、積極的に発言したり、行動ができるようにしむける配慮を

忘れてはなりません。

園生活が自分のものになり、失敗しながらもまっとうから物事に取り組む子どもの顔つきはいきいきとしています。積極的な幼児は、少々度はずれの悪ふざけを始める時期です。教師の役割は、豊かな経験をもち活動が活発になる子どもたちの交通整理と、秩序を保つための方向づけをすることでしょう。さしたり空港のコントロールタワーの役といったところでしょうか。

このころから、幼児はようやく幼稚園生活が楽しいものとなり、自分の幼稚園という意識が次第に喜びに変わり、自分たちで考え、計画をし、行動できる充実した生活を送るようになります。秋の運動会や遠足などの行事に対しても、自分なりの期待や希望を持って積極的に参加するようになり、当番やリーダーになって、遊びや生活の役割を果たそうという気持ちもわいてきます。まだ、やり方は未熟で不器用ですが、失敗を恐れてはなりません。命にかかわることでないかぎり、子どもなりの考えを尊重し、友だちの知恵や力も借りて、みんなで励まし合い、どうすればよいかを考え合ってやらせてみることです。

(神戸常盤短期大学)